

鞠智城跡深迫門の土塁構造と構築技術

歴史公園鞠智城・温故創生館 宮崎敬士

1 鞠智城跡の城門

鞠智城跡でこれまで確認されている城門跡は、東から、深迫門跡、堀切門跡、池ノ尾門跡の計3か所である。いずれも鞠智城跡の南側に位置し、城外から城内に通じる谷部を塞ぐように立地している。また、城跡の北側谷部にも城門の存在が推定されるが未だ確認はされていない。確認された城門跡のうち、深迫門跡、堀切門跡は傾斜の急な谷部に立地するが、池ノ尾門跡は傾斜が比較的緩い谷部に立地するなど、同じ谷部といえどもその立地条件は異なる。そのような異なる地形条件に合わせるように各城門及び付属施設が構築されていると考えられ、その構造解明のための調査を各城門跡において実施してきた。



Figure 1 空から見た鞠智城跡

2 深迫門跡の調査

(1) 位置と特徴

深迫門跡は、鞠智城跡の城域の南を限る外郭線が、その東端で北に向きを変える地点に位置し、城域の南東隅に所在する。また、東方向に開口する谷部を塞ぐように立地しており、そのすぐ西の城内側には池ノ尾門跡に通じる谷の始点がある。門跡の標高は約123mを測る。深迫門跡における発掘調査は、これまで昭和42年度の第1次調査から令和4年度の第37次調査まで7次にわたって実施してきた。これまでの調査によって、地元で「長者どんの的石（まといし）」と

古くから呼びなわされてきた門礎石のほか、版築土塁やそれに伴う柱穴や石列等を確認している。これまでの調査において、城門の原位置は確認されなかったものの、谷部両側の城壁が版築土塁で構築され、それに伴う柱穴等を確認した。以上のように、城門跡の防御施設の構造とともにその築造方法が明らかとなった。



Figure 2 長者どんの的石

(2) 深迫門跡の調査

第1次調査（昭和42年度）

深迫門跡が所在する谷部周辺の地形測量、門礎石の実測、及び門礎石の埋没状況の把握を目的としたトレンチ調査を実施した。

門礎石の位置については、石の移動目的の穴以外、層序の攪乱がみられなかったことや、門礎石の下位、あるいは同一レベルとなる層から瓦片等が検出されたこと、門礎石の傾斜が根石を抜き取って持ち起こした結果であるとの考え方が合理的であるとするを理由として、原位置に近いとの見解を示した。

また、門礎石の形状は、長軸 268 cm、短軸 226 cm、厚さ約 80 cmを測り、上面は特に加工した痕跡は認められないものの、概ね平滑に仕上げられていることを確認した。この門礎石には長径約 20 cm、短径約 18 cm、深さ約 14 cmの軸摺穴が1つ穿たれているが、この軸摺穴は、縁が二段となり、完全な同心円を描かないこと、また、鉄製受皿等が存在した痕跡は認められないことなどが観察された。

また、片袖式の門であったかを確認するため、確認された門礎石の対称位置に対となる門礎石の有無の把握を目的として、2ヶ所にトレンチを設定して調査を行



Figure 3 深迫の門礎石

い、その結果、軸摺穴から南へ約 5.8m の地点に、礎石の根石群と想定される直径約 20 cm の石からなる石群を確認した。

第 3 次調査（昭和 43 年度）

城外から深迫門にいたる道路（登城道）の検出を目的として、門跡と門跡北側の尾根にトレンチを設けた調査を実施した。

門跡の調査では、地表下 20～30 cm のところで硬度が増すため、当時の地表面である可能性を示唆した。また、門礎石より約 50 cm の地点で黒色粘土と白色粘土が圧延された状況で検出した。黒色粘土、白色粘土ともに硬く、白色粘土の下に黒色粘土が認められる部分もあり、また、版築状を呈していた。さらに幅 2.8m ほどの浅い凹字状の平坦面を検出し、それが道路跡である可能性を指摘した。その想定道路跡の北側には、約 3.3m の間隔で東西 2 基の柱穴を検出し、道路の境を示す柱穴の可能性を指摘した。

第 16 次調査（平成 6 年度）

深迫門跡門礎石が位置する南東方向に開口する谷頭全域の調査を実施した。

まず、門礎石の原位置を確認するため、第 1 次調査時の調査トレンチを拡大して再調査を実施した。その結果、門礎石は後世に今の場所へ運び込まれたものが、その後、耕作のため半分を地中に落とし込んだものと結論づけた。なお、第



Figure 4 深迫門の構造（第 16 次調査）

3 次調査時に門礎石の地業穴とされた土坑の見解についても門礎石の地業穴ではないと修正した。

また、深迫門跡の所在する谷部の南北両側において版築土塁を確認した。地形は後世に段々畑として造成された関係で段地形を呈し、その 2、3、4 段目の法面から互層の盛土を検出し、谷を狭めるための版築土塁が存在していたことが明らかとなった。おって、谷部の南側から方形状の掘方 6 基を検出し、そのうち 2 基は柱穴を伴い、柱間間隔は 1.8m であった。これについては、版築土塁の裾部に位置し、登城道の南縁に並ぶ杭列であると判断した。さらに、谷部中央の 4 基の土坑のうち 1 基の底部から石列が検出され、版築土塁の下層部の石列と推定した。

第 28 次調査（平成 18 年度）

深迫門跡門礎石の原位置の確認と、深迫門跡の構造、その中でも特に版築土塁の範囲を解明することを目的として調査を実施した。

調査は第 16 次調査の成果に基づいて行うこととし、合計 12 本のトレンチを設定して調査を実施した。

調査の結果、土塁前面に柱列及び石敷きを確認し、それにより土塁の規模及びその範囲が明らかとなったが、門礎石の原位置の解明まではいかなかった。

第 16 次調査において、南土塁の東に柱間約 1.8m の柱列の存在が確認されていたが、第 28 次調査によってさらに北側に 1 間分の柱掘方を検出した。さらに北土塁においても、柱の痕跡や掘方を約 1.8m の間隔で 7 間分確認した。その柱痕跡は盛土部分に食い込むような形で検出されており、版築工法における支柱であることを確認した。そのため、南土塁の東側の 6 基及びその北側の 1 基の柱掘方についても、盛土自体はすでに消失しているものの、版築に伴う支柱穴であるものと判断した。

第 16 次調査の際に南土塁裾部で石敷きが一部検出されていたが、第 28 次調査でその延長と土塁裾の石列を確認し、さらに北土塁前面においても確認した。また、土塁前面の柱掘方と石敷きの関係を整理し、土塁本体の構築と石敷きは一連の工程の中に組み込まれていたものと判断した。

このように、土塁裾部を確認したことによって、土塁の延長方向及び規模が明らかとなった。南土塁は北西方向に延びており、門口を挟んだ北土塁については、北東方向に延び北側尾根の東端部にとりつく。南土塁の規模は、部分的に残る盛



Figure 5 深迫門の構造（第 28 次調査）

土から、土塁幅約 6.7m、土塁高約 4.0m、北土塁については土塁幅約 15.0m、土塁高約 4.0m の規模であることが明らかとなった。

第 35-37 次調査（令和 2-4 年度）

深迫門跡のこれまでの調査で不明確であった尾根上部から登城道付近までの土塁構造と登城道の時期的変遷等を解明するため、第 35 次調査は第 16 次調査で実施した 2 段目の壁面の実測図を完成させること、第 36 次調査は 35 次調査で確認された 3 段積の列石を検討すること、第 37 次調査は門道及び城門の位置を推定することを主目的に実施した。

版築の基底部の構造を確認するためにトレンチを入れ、3段の石積みを検出した。石積みの底面の高さは標高124.5mで版築が確認できる高さは標高約129.5mである。その標高差から土塁の高さは約5mと考えることができる。また、深迫門跡の北側尾根崖面で版築を確認したことから、調査担当者は少なくとも高さ6m以上の城壁があったと推量した。

なお、北土塁南端裾部では、土塁前面の柱穴列が複数列となる状況を検出した。

また、南土塁は、地山を階段状に整形した後に版築したことを確認した。



Figure 6 版築と3段の石積み

3 深迫門跡の調査成果

(1) 門礎石

長軸約268 cm、短軸約226 cm、厚さ約80 cmを測り、石材は花崗岩である。上面には明瞭な加工痕はないものの概ね平滑で、端部に近い位置に1つの軸摺穴が存在する。この軸摺穴は、長径約20 cm、短径約18 cm、深さ約14 cmを測り、2段に狭まる形状をなしているが、完全な同心円にはならない。また、軸摺穴の内部には軸受けの機能をもつ鉄製受皿等があったことを示す鉄錆等の痕跡は認められない。

この門礎石は、第1次調査においては原位置を保っているものと判断された。しかし、第16次調査における再調査の結果、この門礎石は原位置を保っていないものと判断した。

(2) 版築土塁

深迫門跡が所在する谷部を挟んだ両側で版築土塁を検出した。この土塁は城門推定箇所両脇に取り付いており、広い谷部を遮蔽する目的で構築されたものと考えられる。城門推定部を境として、北側を北土塁、南側を南土塁とした。

北土塁においては、段状地形の上から 2 段目の法面において、茶褐色土を強く叩きしめた土塁の基底部（長さ 10.4m 分、層厚最大 40 cm）を検出するとともに、北端寄りの部分で地山にとりつく土塁の先端部を確認した。3 段目においては、長さ 13m 分の版築土塁を検出した。最大の層厚は 1.6m を測り、20～30 層に及ぶ盛土が積み重ねられていた。それぞれの盛土は層厚 10 cm にも満たないもので、粘土を非常に強く叩きしめたものである。盛土には、茶白色、灰茶色、橙褐色、黒茶色のローム層土が利用されていた。4 段目は、北端で凝灰岩の岩盤に取り付く形で版築土塁が築かれている。オリーブ色を基調とする盛土であるが、2 段目の法面のようにはっきりとした分層はできない。また、3 段目の土塁の北東端から 8.9m の箇所には、盛土の上面にひび割れのような縦位の細線が認められた。なお、段状地形の 1 段目においては、版築の痕跡は認められなかった。

南土塁においては、上から 3 段目において長さ 4.5m、層厚 60 cm にわたって黒色と茶色のローム層土を主体とする盛土を確認した。この箇所は谷間の斜面に沿って南側から北側へ向けて緩い傾斜をなしている。4 段目は、谷側が黒色土と灰色土の盛土で、山側が茶色ローム層土の盛土であった。全体的に盛土の層厚は地形に即したもので、谷間の斜面中央部が最も厚くなる。一部でみられた盛土のずれは、上下からの圧力によるものと考えられるが、地震等で生じた可能性もある。なお、段状地形の 1 段目と 2 段目においては、版築の痕跡は認められなかった。

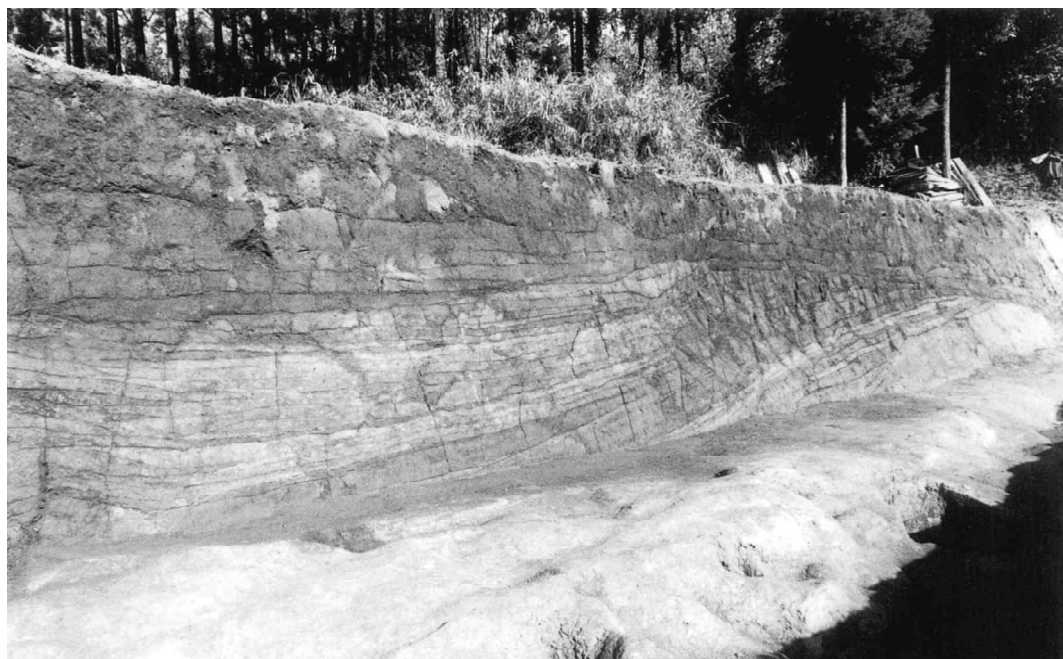


Figure 7 深迫門の版築土塁

南土塁においては、その東側に柱間 1.8m の間隔で並ぶ柱穴を 7 基、北土塁の裾部でも柱間 1.8m の間隔で並ぶ柱穴を 8 基確認した。特に、北土塁の柱痕跡はやや盛土部分に食い込むような形で検出されており、これら一連の柱穴は版築工法における支柱の痕跡であると考えられる。

また、土塁の裾部には石列と石敷きが存在することを確認した。

南土塁では、石列は安山岩系の 30～45 cm 大の計 4 石の石材が前面を揃えるように整然と並べられていた。さらに、この石列前面には、土塁裾部に平行する幅 1.2m の帯状の石敷きを確認した。これらは外に向かい勾配約 16 度の傾斜で下る。この石敷きには、10～30 cm 大の安山岩系の石材が主に使用され、軽石も使用されていた。石敷きの前面は不揃いで、上面を揃えるような意識は認められない。石敷きの上面には、盛土がなされていると考えられる。

北土塁では、石列は計 3 石分を確認し、土塁前面から奥に向かって約 17 cm 入る。この石列の前面に、土塁裾部に平行する幅約 70～80 cm の石敷きが存在する。なお、版築の基底部の構造を確認するためのトレンチで検出した 3 段の積石は版築内部にあり、石列とは異なる様相を示している。

これらの石列と石敷きは、ともに上面を同じレベルで揃えているようではあるが、石材がまばらであり、また、外縁部の仕上げが粗雑であることから、見せるとい意識が低い状況がみられる。また、土塁前面の支柱と石敷きの関係であるが、南土塁の支柱の掘方の上面には石敷きがないことから、石敷きと支柱は一連の土塁の築造工程の中に組み込まれていたものだと判断される。

以上のように、土塁裾部を確認できたことにより、土塁の延長方向と規模が推定可能となった。南土塁は北西方向に延びており、門口を挟んだ北土塁については、北東方向に延び、北側尾根の東端部にとりつく。土塁の規模は、南土塁が幅約 6.7m、高さ約 4m、北土塁が幅約 15m、高さ 4m 以上と推定される。なお、この深迫門跡の土塁は、北土塁における背面端部の整形状況から内托式の土塁であると想定される。



この文書は、鞠智城跡の総括報告書『鞠智城跡Ⅱ』と各調査報告書の記述を基にしています。

鞠智城跡の報告書やパンフレットは（独）奈良文化財研究所「全国遺跡報告総覧」から無料ダウンロードできます。